

## 正しい判断のために

三D 遠藤 公嗣

ときつのお叱り。泣く子と地頭にはなんとやら、「ご無理ごもつとも、もう決して申しません。」と約束してつぶやいた。「それでも地球は回っている。」これは科学と宗教の対立を示すエピソードですがこれも大して意味がないことになってしまいます。だから自分にとつて便利のいい方をとればいいことになり

ます。日常生活の上では地球が止つていたりした方が便利です。「ああ朝日が昇る……。」とは誰でもいいますが、「ああ地球がまわつて太陽が見えるようになってきた……。」なんと言うのは詩になりませんか。

ややこしいことをたくさん書きましたが、要するに私はみなさんに、人間は体よりも心のしめる割合が大きいこと、そしてみんなスパーマンのような無限の力を持つていて、ことを知つてもらいたかつたにすぎません。科学と宗教との戦いにやがて終止符が打たれて人類が本当に平安に暮らす日も、案外近いのではないでしょう。

古代のギリシアのあるソフィストの言葉に次のようなものがあります。

「奇数と奇数を加えると、それは必ず奇数となる。なぜなら加えられた後の「もの」の、もとになつてゐるものは奇数であるから。」  
数学の問題ではないのですが、これは明らかに誤りですね。もともと、偶数とは二の倍数のことで、奇数とはそれに一を加えたものことです。だから奇数を二つ加えれば、各々の奇数の持つている一が二つになり、それは二の倍数ですから全体も二の倍数で偶数になるわけです。このように私たちは考えます。ところで私たちはなぜこう考えるのでしょうか。言うまでもなく私たちは奇数とは何かを知つてゐるからです。つまりそれに対する知識があるからです。

さてもしここに奇数の意味を知らない人がいたら彼はどうか考えるでしょうか。言葉の上から見ると誤りはありません。たゞし奇数

のところへ水と置き変えてもおかしくありません。水と水を加えてもやはり水であるのは確かです。決してコーヒーにはなりません。このように考えて、彼はこれは正しいとするかもしれないのです。それではなぜ彼がこう考えたかという点、要するに結局は彼に奇数についての知識がなかつたからだということが出来ます。

ここで私たちは次のことを理解します。つまり、もの判断は知識によつて行なわれるということ。だから正しい判断は正しい知識から得られ、正しくない判断は正しくない知識からおこつてくるものだといふことができます。では正しい判断を得るためにどうすればよいか、言ひ変えると正しい知識はいかにして得られるのでしょうか。

一般に自分の理解することのできないものに対して、考える出発点とする態度に二とおりあります。一つは信じて、信じていく方法です。もう一つは疑いから信じていく方法です。では信じて、信じていく方法で、前の「彼」氏に再び登場してもらつて考えてみましょう。彼は奇数の意味を全然知りませんでした。しかし水を加えても水

であるということを知つていました。そこで彼は奇数と水と同じようなものと考え、つまりそう信じたのです。ここに彼の誤まつた根本原因があつたといえます。

これに反して、疑いから出発すればどうなるでしょうか。まず彼は奇数の意味を知ることと努めるでしょう。それは彼には奇数の意味が解らないのですから、この直接的な問題を最初に考えるのはあたりまえです。そうして彼は正しい判断を下すのに必要な正しい知識を得るでしょう。

ここで私たちはもう一つのことを理解します。それは、ものを考えるのに疑いから出発すべきであるということです。信じて、信じてから出発すると、砂で作つた城と同じように極めてもろいものとなります。

今まで述べてきたことをまとめて逆に考えると次のようになります。

ものごとを考えるにあつてまず疑うこと。そして、それで得た正しい知識によつて、正しい判断がなされるといふこと。

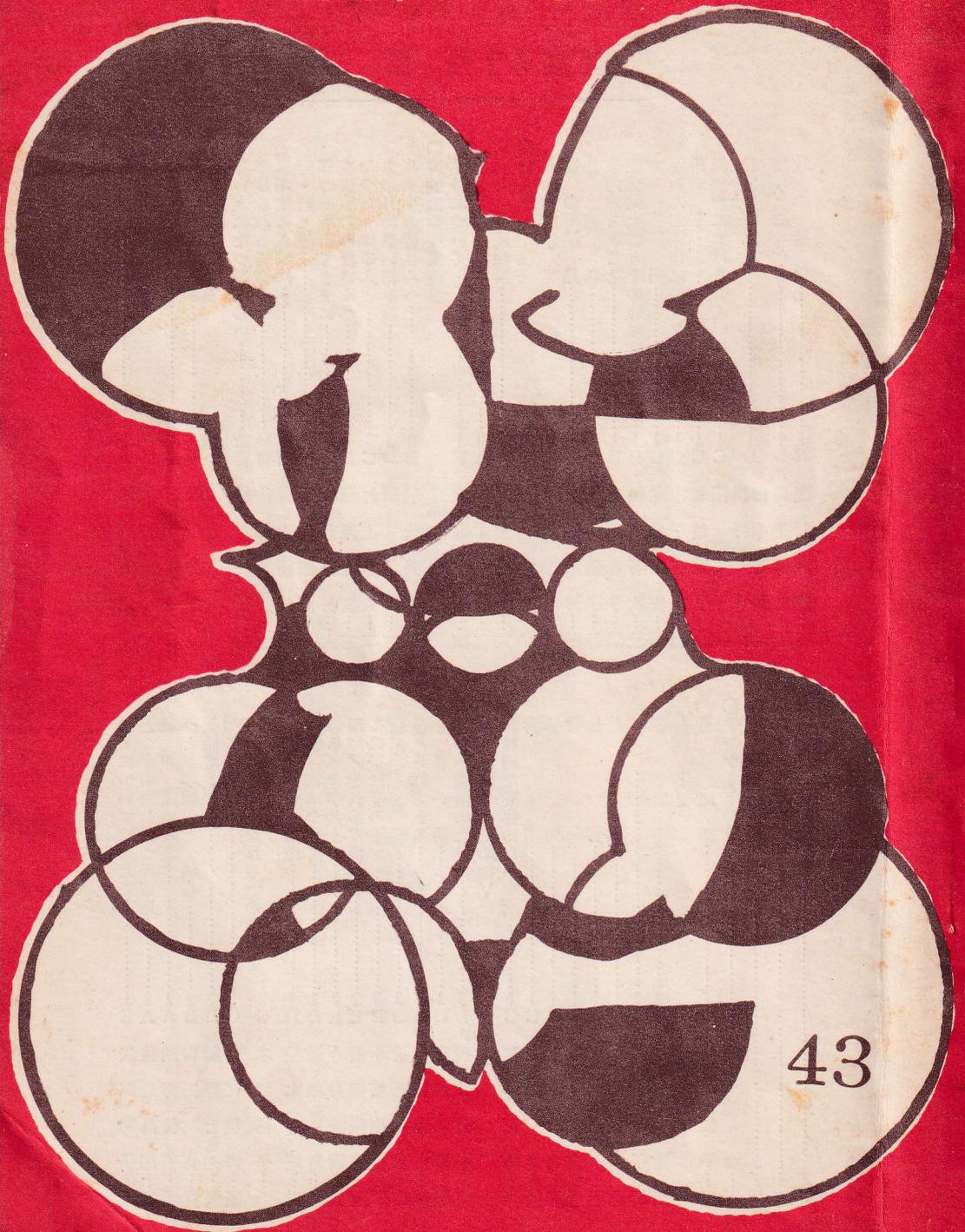
十九世紀のある科学者は「すべてを疑ふべし」といつています。このわずか八文字の中になんと深い意味がこめられていることでは

ようか。





操 麓



43

岡山大学教育学部附属中学校生徒会

新築落成記念



昭和41年3月23日 生徒会編集部発行(非売)